



重度身体障害者は介助者との関係をどのように捉えているのか

石山, 周

(Citation)

神戸大学発達・臨床心理学研究, 18:29-35

(Issue Date)

2019-03-31

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/81011699>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81011699>



重度身体障害者は介助者との関係をどのように捉えているのか

What do persons with severe physical disabilities think about their relationships with helpers?

石山 周*

Shu ISHIYAMA*

要約: 介助サービスを利用しながら生活する重度身体障害者にとって、介助者との関係は非常に重要である。これまでの障害者運動では障害者が全ての意思決定を行い、介助者に一方的に指示する関係が重視されてきたが、実際に介助者と共に生活する重度身体障害者が介助者との関係をどのように捉えているのかはほとんど検討されてこなかった。本研究では、介助サービスを利用して生活する重度身体障害者3名にインタビュー調査を行い、グラウンデッド・セオリー・アプローチを用いて質的な分析を行った。分析の結果、介助者との関係を評価する上で、介助者が障害者の意思を尊重しているかどうかは最も重要であり、意思を尊重しない介助者であった場合は、緊張感のある関係として捉えていることが示唆された。一方で意思を尊重する介助者であれば、自分で意思決定が行え、安心感を得ていることが示された。今後の課題として、調査協力者の限定性や長期化した関係を検討することが挙げられた。

キーワード: 重度身体障害者、介助関係、意思決定、グラウンデッド・セオリー・アプローチ

1. 問題と目的

近年、どんなに重い障害があっても、施設ではなく地域で暮らすという選択肢が生まれている。様々な支援制度を利用して生活する選択肢が広がっているが、独力で日常生活の活動を行えない重度身体障害者にとって、他者による介助は生きていく上で常に必要なものである。そのため介助者との関係は、重度身体障害者の生活を考える上で重要だと考えられる。常時介助が必要ということは、常に他者(介助者)と一緒にいる必要があるとも言える。一般的には複数の事業所からの複数の介助者が交代で1人の重度身体障害者の介助を行っている。

多くの時間介助を受ける重度身体障害者と介助者の関係は、他の障害者や高齢者とその介助者の関係とは大きく異なる点がある。それは、障害者の意思決定を何よりも重視し、介助者の意思をできるだけ排除しようとする関係であることである。その理由として、前田(2009)は、重度の障害があるために支援者側が「善意で」障害者の意思を事前に察知し、あらゆることを先回りしてやっしまい、障害者が自らの暮らしをデザインする契機を介助者が掴むことのないよう、介助者の意思や主体性は必要とされていないからだ指摘している。また、管(2010)は、重度身体障害者は自らチラシを配るなどして介助者を集め、障害者自身がどの

ような介助が必要か教えるという他の専門職が行う援助と異なる関係性を見出している。これらの指摘は、支援者側が支援方法や技術を提供するのではなく、あくまで障害者が支援者に支援方法を指示して教える関係を示唆している。介助者の意思を軽視し、障害者の意思を重視した関係は「介助者手足論」とも言われ、地域での生活を目的とした障害者運動の中では重要な考えとされてきた(前田, 2009)。被支援者と支援者の関係として、重度身体障害者と介助者のこのような関係は特殊な関係と言える。彼らの生活は、赤の他人である介助者に対して自分が行いたい行動をすべて指示し、介助者はそれに従うことで成り立っている。常に支援を受ける側が指示し、支援する側がそれをすべて聞くという状況は他の高齢者・障害者支援などではほとんど見られない。そのため、重度身体障害者と介助者の関係を意思決定に注目して検討することは他の領域の支援にも重要な示唆を与えるだろう。

しかし、このような重度身体障害者と介助者の関係性を扱った研究は多くはない。例えば、橋本(2007)の研究では、障害者と介助者の関係性をその時代の介助をめぐる制度に注目して検討しており、梶(2008)は介助サービスの利用制限や補助具の問題を中心として検討を行っている。介助者との関係性は、その時の社会制度や介助技術の発展の程度に影響されることは確かであるが、

* 神戸大学大学院人間発達環境学研究科博士課程前期課程

具体的に重度身体障害者が介助者との関係をどのように捉えているのかは明らかにされていない。八巻（2014）は、介助者が一方的に指示・指導するのではなく、ひたすら障害者の要望に従う手足でもなく、共通の目標に向かって協働する関係性を築くことの必要性を指摘しているが、そのように障害者と介助者との協働する関係がどのようなものか検討した研究はほとんど見当たらない。これまで障害者が自らの意思決定を重視する生活を目指してきたにも関わらず、意思決定に最も関わりのある介助者との関係を障害者自身がどのように捉えているのかの検討は不十分と言える。介助サービスを必要とする量が増えるほど、サービスを提供する側から支配されコントロールされる可能性も高くなる（北野，1993）ため、介助関係は重度身体障害者の生活の質を考える上で重要な視点である。彼らの生活の質を高める上で、介助者との関係をまず障害者自身の視点から探索することが必要であろう。

このように重度身体障害者が介助者との関係性を、どのように捉えているのかを検討することは、障害者が主体となった豊かな生活を支える上で重要である。以上により本研究では、重度身体障害者が介助者との関係をどのように捉えているのかを探索的に検討することを目的とする。その際にはこれまで述べられてきたような、障害者自身がすべての意思決定を行い、介助者に指示し教える関係に注目して研究を進めることとする。障害者の視点から関係をとらえることは、介助や支援への示唆となるだけでなく、直接的な意見や評価を得にくい介助者にとっても、自らの介助を客観的に批判・評価することにつながり、障害者と介助者のよりよい関係形成にとっても重要な意義があると考えられる。

2. 方法

(1) 方法の選択

本研究の目的は、重度身体障害者が介助者との関係性をどのように築いているのかを探索的に検討することである。介助者ではなく障害者の視点からの個別な関係性に注目するため、客観的な仮説検証や共通性を扱う量的研究ではなく、個別的な意味が扱え、仮説生成的な質的研究が適していると考えた。

(2) 手続き

調査方法は幅広くデータの収集が行え、柔軟に対応できる半構造化面接を採用した。研究協力者は、自宅生活または一人暮らしをしている重度身体障害者3名（Table1）で、1回約1時間の半構造化面接を個別に行った。全ての調査協力者は自立生活運動や権利擁護の活動に関わっており、介助者手足論や介助者に指示して教えるという思想の影響を受けていると考えられ、今回の目的に即していると思われる。調査場所として協力者の自宅、または筆者が働いている自立生活センターの一室を利用し、2017年10月～11月にかけて行った。質問内容は、①介助サービスの利用を始めたきっかけ②印象に残っている介助者について③新しい介助者と昔から入っている介助者との違い④介助を指示するときの気持ち⑤介助者に期待することであった。分析方法には、心理学研究においても多く採用されており、手続きが体系化されているグラウンデッド・セオリー・アプローチ（GTA）を採用し、その中でも Strauss & Corbin（1998）による理論に基づき、具体的な

手続きは戈木（2008）を参考に分析を行った。

(3) GTA について

本研究で採用した GTA の基本的な手続きの流れは、①データ収集、②特性と次元に基づいたデータ同士の比較からカテゴリ（概念）の生成、③データ収集と概念生成を繰り返しカテゴリの精緻化を行い、④③の手続きの中で新たにデータを得ても新たな知見が得られない状態（理論的飽和）に達したら得られたカテゴリからモデルを生成するというものである。本研究では、時間的制約のため、全てのデータ収集後、1人目のデータ同士の比較を行ってカテゴリとモデルを生成し、2人目以降は同様の分析を行ったあとで現在生成されているカテゴリ同士の比較を行って、モデルを洗練させる方法をとった。これ以降、【 】内の言葉はカテゴリを示し、〈 〉内の言葉はカテゴリの特性（プロパティ）を意味する。

Table1 協力者のデータ

	分析の順	性別	年齢	居住形態	介助者の利用時間
Aさん	1人目	女性	39歳	両親と同居	9時～22時（週2回夜勤あり）
Bさん	2人目	男性	41歳	1人暮らし	予定に合わせて（夜勤あり）
Cさん	3人目	女性	42歳	1人暮らし	基本的に24時間

3. 結果と考察

(1) 分析の流れ

本研究では、重度身体障害者が介助者との関係をどのように捉えているか把握するため、まず3人のデータの読み込みから、障害者が意思決定を行い、介助者に指示するという関係を確認した。そして、分析する現象を重度身体障害者が介助者に指示して教える関係として分析を行った。分析は年齢順に行った。本研究は基礎的なカテゴリを生成するための1ステップであるため、分析の順は結果に大きく影響しないと考えられた。まず1人目の分析で関係性を築く上でカテゴリを生成し、カテゴリ関連図とストーリーラインを作成した。2人目、3人目も同様の分析を行い、その都度カテゴリの精緻化、カテゴリ関連図の統合を行った。

(2) 1人目の分析

1人目（Aさん）の分析では、95のラベルと18のカテゴリが生成された（Table2）。問題意識の通り、障害者が自ら意思決定を行い、介助者へ指示することに注目して分析を進めた。その結果7つのカテゴリからなるカテゴリ関連図（Figure1）とそのストーリーラインを作成した。カテゴリ関連図に含まれなかったカテゴリで【気遣いへの感謝】は中心のカテゴリと特性・次元レベルで結びつかなかった。その理由としては、「何気ないところで、私が忘れてることをしてくれたりとかする人もたまにいる。中には2人とも忘れてるときあるんですけどね、覚えといてって言いながら2人でね。そういう時はありがたいなあと思ったり。」という発言のように、非常に限定された場面での現象に近いと考えたが、今後更に具体的な介助場面での感情や行動のデータが集まることにより、結びつく可能性がある。また、【指示方法を学ぶ】は初めて介助者を利用し始めたとき固有の現象であり、【事業所

の条件】などは介助者との関係を築く上で重要なカテゴリである可能性もあるが、データの少なさなどから中心カテゴリと結びつくことがなかった。今後はこの点にも注目して質問項目を考える必要がある。

このような分析から描かれたストーリーラインは、「Aさんは〈介助に入った期間〉が短い介助者と会うとまず【介助者の様子を見る】ことから始める。〈介助者の様子〉とは〈指示の受け取り方〉や〈意思確認の量〉、〈指示を待つ姿勢〉などであり、その時の〈介助者の慣れ度〉は低いため、〈指示の丁寧さ〉は高い。【介助者の様子を見た】結果、介助者の〈指示を待つ姿勢〉があり〈意思確認の量〉も多く、〈指示の受け取り方〉が素直な【指示を待つ介助者】だった場合は、〈介助者への印象〉は良く、さらに家事などの日常生活についての〈介助者との考え方の違い〉が小さければ、〈介助者への信頼感〉や〈自分の気楽さ〉は高くなり【理解し合える安心感】を感じる。一方で、〈介助者との考え方の違い〉が大きい場合は〈意思確認の必要性〉や〈話し合いの必要性〉が高まり、自分の考え方を説明する【介助者との話し合い】を行う。その中で〈介助者の指示を受け取り方〉が素直で〈介助者の介助内容の理解度〉が高くなると、〈介助者への評価〉も高まり【理解し合える安心感】が生まれる。ところで【介助者の様子を見た】結果、〈介助者の指示を待つ姿勢〉がなく、〈意思確認の量〉も少ない【指示を聞かない介助者】であった場合は、介助者に注意はするものの【指示する抵抗感】が生まれる。この状況では〈指示のしにくさ〉があるものの、介助者の〈介助に入った期間〉が長く〈介助に入る頻度〉も多いと、〈介助者の慣れ度〉や〈介助者の介助内容の理解度〉が高まる【介助者の慣れ】があり、〈介助者と話し合う量〉が多くなることで【介助者との話し合い】を行うことができ、【理解し合える安心感】へとつながる。」

本分析の結果、出会った【介助者の様子を見る】ことから、〈介助者の様子〉によって【指示する抵抗感】もあるが、【介助者との話し合い】をしていく中でこの介助者に介助を任せられるという信頼である【理解し合える安心感】へとつながる関係として捉えていること示唆された。次の分析では、今回生成されたカテゴリの精緻化と今回は関連づけることができなかったカテゴリの充実、新たなカテゴリの可能性を意識しながら分析を進めた。

Table2 1人目の分析で生成されたカテゴリ名

1	介助者の様子を見る
2	指示を待つ介助者
3	指示を聞かない介助者
4	介助者との話し合い
5	指示をする抵抗感
6	介助者の慣れ
7	理解し合える安心感
8	考え方の違いの理解
9	介助者による自己判断
10	気遣いへの感謝
11	自分の指示の重要性
12	指示する限界
13	介助自体を嫌う態度
14	介助自体を好む態度
15	介助者に合わせた指示
16	指示方法を学ぶ
17	事業所の条件
18	介助者の考えを知る面白さ

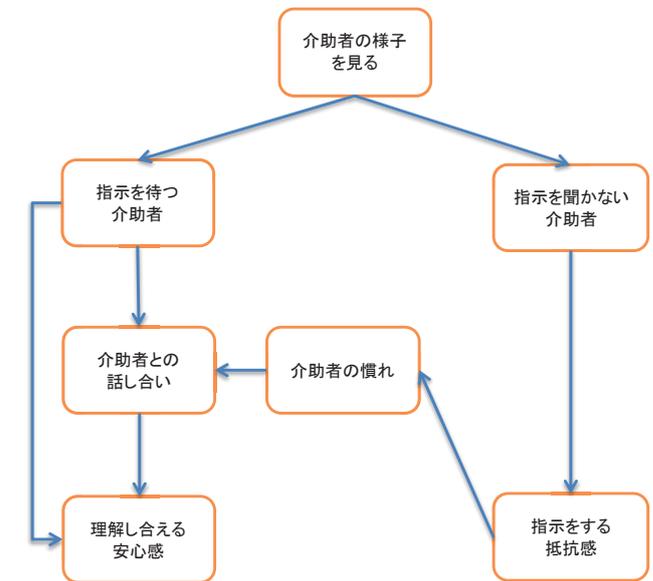


Figure1 1人目の分析のカテゴリ関連図

(3) 2人目の分析

2人目(Bさん)の分析では、75のラベルと13のカテゴリが生成された(Table3)。1人目と同様に自分で意思決定を行い、介助者に指示する関係を意識して分析を進めた。その際に1人目のカテゴリ関連図を参考にしつつ、GTAの手順に基づき、矛盾があった場合は適宜そのデータに合わせてカテゴリ内・カテゴリ同士の構造を検討した。その結果6つのカテゴリからなるカテゴリ関連図(Figure2)とストーリーラインを作成した。カテゴリ関連図に含まれなかったカテゴリのうち【生活における介助者の必要性】【自立生活を促す意見】は介助者との関わりではなく、地域での生活を始める状況のカテゴリと考えられた。また「基本は全部僕が言うてその通りにやってくれる人というのはやっぱり基本おっきな大原則やと思う。やっぱりそうした障害者が地域で生きていくっていうんは、やっぱりそれが基本やと。言いながら僕も手抜きしたいときあるしさ。」という発言に表れているような【介助

者に任せたい気持ち】はこれまで注目してきた障害者自身の意思決定を重視する考えとは相反し、介助者の意思を重視したカテゴリであった。【介助者との仕事の関係】と【介助者との友人的關係】も同様に、〈介助者との性格の相性〉(趣味の一致)といった介助者の性格の違いをもとに対になると考えられるカテゴリが生成された。これらは調査を行う際に想定していた意思決定を重視して指示していくカテゴリと反するデータであったため、十分なデータを得ることができなかったが、今後の調査において検討する必要があると考えた。

このような分析から描かれたストーリーラインは、「Bさんは、〈介助に入った期間〉が短く、〈介助者の介助内容の理解度〉が低い間【介助者の特性把握】をする。〈介助者の意思確認の有無〉や〈介助の技術の高さ〉、〈指示の受け取り方〉を把握しようとするが、その際の〈緊張感〉や〈不安感〉、〈指示の大変さ〉は大きい。【介助者の特性把握】をして、〈介助者の意思確認の量〉が多く、〈利用者の意思の尊重度〉も高い【意思確認をする介助者】に対しては、〈自己決定の重要度〉の高さや〈説明する意思〉の強さ、〈介助者との考え方の違い〉から【自分の考えの説明】を行う。〈自分の考え方〉とは生活方法や介助方法であり、そのような〈基本的な介助の重要性〉は高い。こうした【自分の考えの説明】によって、〈介助者の介助内容の理解度〉は高まり、〈介助者への信頼感〉は高く〈介助者への評価〉も良くなって【介助者への信頼感】が生じる。一方で〈介助者の意思確認の量〉が少なく、〈利用者の意思の尊重度〉も低い【指示を無視する介助者】への〈介助者への評価〉は悪い。【指示を無視する介助者】に対しても、〈自己決定の重要度〉の高さから【自分の考えの説明】をしようとするが、〈介助者の技術の高さ〉や〈指示の受け取り方〉といった〈介助者の特性〉によって〈指示方法の変化〉をして【介助者に合わせた指示】を行い、介助者が素直に受け取った場合は【自分の考えを説明】することができ【介助者への信頼感】が生じる。しかし、介助者が受け取らなかった場合は【介助者に合わせた指示】を続けることになる。」

本分析の結果、出会った【介助者の特性把握】から【自分の考えの説明】を行ったり、〈介助者の特性〉によって【介助者の合わせた指示】を行ったりすることで、【介助者への信頼感】へつながる関係として捉えていることが示唆された。

Table3 2人目の分析で生成されたカテゴリ
カテゴリ名

1	介助者の特性把握
2	意思確認する介助者
3	指示を無視する介助者
4	介助者への信頼感
5	自分の考えの説明
6	介助者に合わせた指示
7	事業所への苦情
8	介助者に任せたい気持ち
9	生活における介助者の必要性
10	1人暮らしの難しさ
11	介助者との仕事の関係
12	介助者との友人的關係
13	自立生活を促す意見

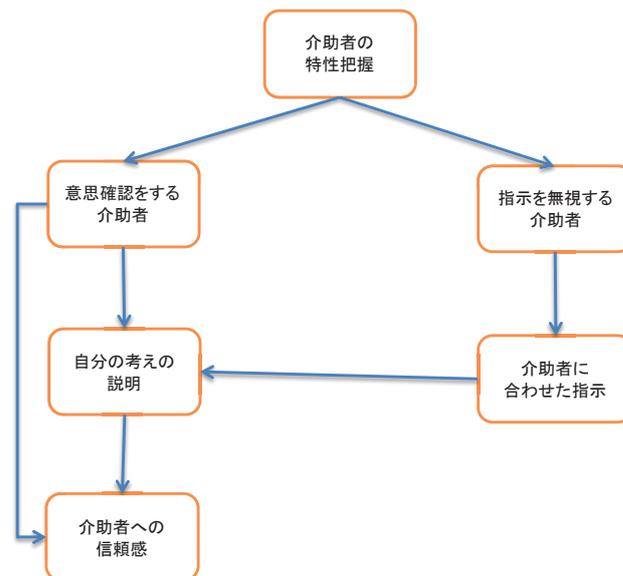


Figure2 2人目の分析のカテゴリ関連図

(4) 3人目の分析

3人目(Cさん)の分析では111のラベルと13のカテゴリが生成された(Table5)。2人目と同様の手続きで分析を行い、7つのカテゴリからなるカテゴリ関連図(Figure4)とストーリーラインを作成した。カテゴリ関連図に含まれなかったカテゴリとして【自分の指示の限界】が、1人目の分析での【指示の限界】、2人目の分析での【介助者に任せたい気持ち】と特性・次元のレベルにおいて関連が想定された。しかし、今回の調査では、障害者が意思決定し介助者に指示するという関係に注目したため、介助者の意思を求めるといった回答を想定した質問はなかった。そのためデータ量が少なく、本研究での分析ではこのカテゴリを含んだカテゴリ関連図を生成することはできなかった。また、【これまでの生活経験】や【生活における介助者の必要性】は介助者との関係を築く前提となるものと考えられ、別の状況と判断した。

このような分析から描かれたストーリーラインは、「Cさんは、〈介助に入った期間〉が短く、〈介助者の介助内容の理解度〉や自分の〈介助者の性格の把握度〉が低いときは、【介助者の様子を見る】。そして〈介助者の能力〉や〈介助者の性格〉を知っていくが、その際の〈自分の緊張感〉や〈自分の不安感〉は高い。〈介助者の指示を待つ姿勢〉があり、〈利用者の意思の尊重度〉が高く〈介助者の意思確認〉がある【指示通りに動く介助者】である場合は、〈介助者への評価〉も高く、〈自分の安心感〉は高くなる。そして、【基本的な指示】を行って〈介助に入った期間〉が長くなり、〈介助者の性格の把握度〉も高まると、【安心できる関係】へとつながる。【安心できる関係】であれば、〈介助が続く期間〉も長く、〈介助者への評価〉も高いが、〈意思決定の重要性〉は高いため、【基本的な指示】は行う。これは〈介助者の指示を待つ姿勢〉が必要となっている。一方で〈介助者の指示を待つ姿勢〉がなく、〈利用者の意思の尊重度〉が低くて〈介助者の自己主張〉が強い【自分勝手な介助者】の場合は、〈介助者への評価〉は低く、〈鬱陶しさ〉もある。【自分勝手な介助者】に対しては〈注意する抵抗感〉や〈緊張感〉があるが〈指示の必要度〉は高いため【介助者に気を使っ

た指示】を行う。その中で〈慣れに必要な時間〉は長いものの、〈介助者の性格の把握度〉や〈自分の慣れ度〉が高まることで【介助者への慣れ】が生じる。その結果〈安心感〉は高くなり【基本的な指示】を行うことで【安心できる関係】へとつながる。」

本分析の結果、出会った【介助者の様子を見る】ことから【基本的な指示】を行ったり、【介助者に気を使った指示】を行ったりすることにより、【安心できる関係】として捉えていること示唆された。

Table4 3人目の分析で生成されたカテゴリ
カテゴリ名

1	介助者の様子を見る
2	指示通りに働く介助者
3	自分勝手な介助者
4	介助者に気を使った指示
5	介助者への慣れ
6	安心できる関係
7	基本的な指示
8	自分の指示の限界
9	これまでの生活経験
10	介助者との距離感
11	辞める介助者
12	生活における介助者の必要性
13	介助者との日常会話

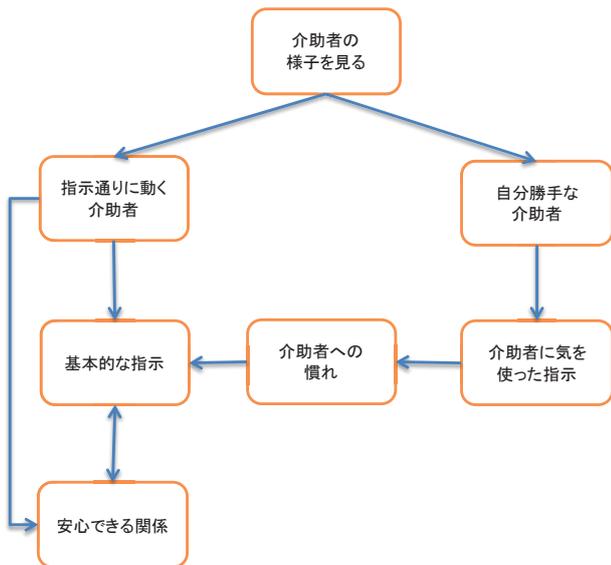


Figure3 3人目の分析のカテゴリ関連図

(5) カテゴリ関連図の統合

3つの分析結果を比較し、特性・次元のレベルで同じ概念と判断した統合カテゴリをTable5に示した。【介助者に合わせた指示】は1人目のカテゴリ関連図には含まれていないが、生成されたカテゴリに同様の特性・次元を持つ【介助者に合わせた指示】というカテゴリが確認された。【介助者に気を使った指示】は【介助者に合わせた指示】と【介助者への抵抗感】の2つのカテゴリがまとまったカテゴリだと考えられた。介助者に合わせた指示という具体的な行為とその際の緊張感や気遣いといった感情であり関連

が強いため1つのカテゴリとして生成されたと考えられる。【介助者の慣れ】については、1人目の分析の中でのみカテゴリとして生成された。しかし、【介助者の慣れ】は〈介助に入った期間〉の長さや〈介助者の介助内容理解度〉の高さなどから特徴づけられるカテゴリであり、【介助者に合わせた指示】によって【介助者の慣れ】が生じた結果【自分の意志で指示】につながると想定することができた。また【介助者への慣れ】は3人目の分析においてのみ生成されたカテゴリであった。【介助者の慣れ】と比較すると、〈介助に入った期間〉の長さは共通するものの、【介助者の慣れ】が〈介助者の介助内容理解度〉や〈介助者の慣れ度〉など介助者側の特性であるのに対して、【介助者への慣れ】は〈介助者の性格把握度〉(〈自分の慣れ度〉)といった障害者側の特性で構成されていた。したがって【介助者の慣れ】と同様に、【介助者に合わせた指示】を行う中で【自分の慣れ】が生じることで【自分の意思で指示】が行えるようになると考えられた。

このような分析の結果、カテゴリ関連図を統合した(Figure5)。カテゴリ名や特性・次元はこれまでの分析と各データを参考に適切な名前に変更した。本研究の分析はこの時点で終了したためこれまでの分析から描かれたストーリーラインを示す。

「重度身体障害者は、〈介助に入った期間〉が短い介助者に対して、高い〈不安感〉がある中【介助者の様子を見る】。〈介助者の様子〉とは、介助者の〈指示の受け取り方〉や〈指示を待つ姿勢〉、〈意思の尊重度〉、〈意思確認の量〉であり、このときの介助者の〈介助内容の理解度〉と自分の〈介助者の様子の把握度〉は低い。【介助者の様子を見た】結果、介助者の〈指示を待つ姿勢〉があり、〈意思確認の量〉が多く、〈意思の尊重度〉も高い【意思を尊重する介助者】だった場合は、〈指示の受け取り方〉も素直で〈介助者への評価〉は高い。その結果、【介助者への安心感】が生じるが、〈意思決定の重要性〉は高いため、家事や介助の方法などの〈介助者との考え方の違い〉がある場合は、【自分の意思で指示】を行う。そして、介助者が指示を素直に受け取ることで介助者の〈介助内容の理解度〉が高まり【介助者への安心感】がある状態となる。一方で、介助者の〈指示を待つ姿勢〉がなく、〈意思確認の量〉が少なく、〈指示の尊重度〉も低い【意思を尊重しない介助者】だった場合は、〈指示の受け取り方〉が素直でなく、怒ったり落ち込んだりすることもある。そのため〈介助者への評価〉も低い。そして【意思を尊重しない介助者】に対しては注意しても改善せず、〈指示する抵抗感〉のある【介助者への緊張感】が生まれる。【介助者への緊張感の理由は介助者の〈意思の尊重度〉の低さや〈意思確認の少なさ〉が挙げられる。またそうした【意思を尊重しない介助者】に対しては〈指示内容の変化〉があり【介助者に合わせた指示】を行う。これは自分の〈緊張感〉も高く【介助者への緊張感】が続くこととなるが、〈介助に入った期間〉が長くなり、介助者の〈介助内容の理解度〉が高まると【介助者の慣れ】によって〈介助者の変化〉があると、介助者は指示を聞くようになる。その結果介助者への評価は高くなり、【自分の意思で指示】が行えることで、【介助者への安心感】へとつながる。また〈介助に入った期間〉が長くなると、【介助者の慣れ】だけでなく自分の〈介助者の様子把握度〉が高まることで、【自分の慣れ】が生じる。その結果〈指示方法の変化〉があり介助者が指示を聞くようにな

る。そして〈介助者への評価も高まり、【自分の意思で指示】ができることで【介助者への安心感】が生まれる。この【介助者への安心感】がある状態とは、〈介助に入った期間〉が長く、介助者は〈介助内容の理解度〉が高くて〈意思確認の量〉が多く、〈指示を待つ姿勢〉があつて、素直な〈指示の受け取り方〉をする。そして自分の〈介助者の様子の把握度〉と〈介助者への評価〉も高いものであり、そうした介助者の〈介助が続く期間〉は長いと考えている。」

Table5 3人のカテゴリの統合結果

1人目のカテゴリ	2人目のカテゴリ	3人目のカテゴリ	統合結果
介助者の様子を見る	介助者の特性把握	介助者の様子を見る	介助者の様子を見る
指示を待つ介助者	意思確認をする介助者	指示通りに動く介助者	意思を尊重する介助者
指示を聞かない介助者	指示を無視する介助者	自分勝手な介助者	意思を尊重しない介助者
介助者との話し合い	自分の考えの説明	基本的な指示	自分の意思で指示
指示をする抵抗感		介助者に気を使った指示	介助者への緊張感
介助者に合わせた指示	介助者に合わせた指示	介助者に気を使った指示	介助者に合わせた指示
介助者の慣れ			介助者の慣れ
		介助者への慣れ	自分の慣れ
理解し合える安心感	介助者への信頼感	安心できる関係	介助者への安心感

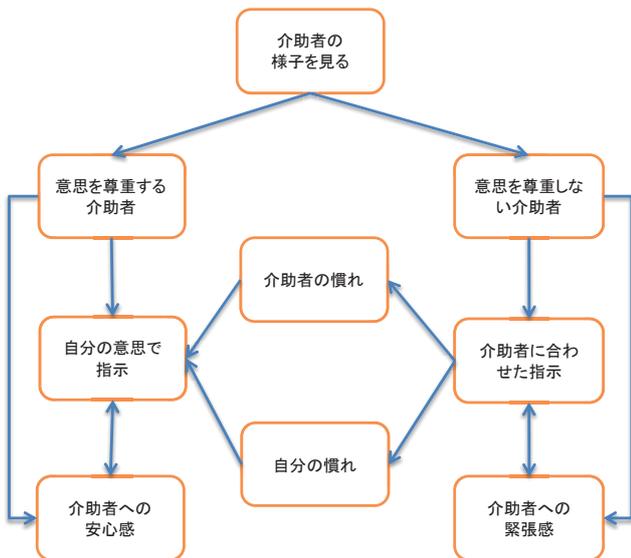


Figure4 これまでの分析を統合したカテゴリ関連図

(6) 総合考察

本研究では、重度身体障害者が介助者との関係性をどのように捉えているのかを探索的に検討することを目的とし、その際には障害者自身がすべての意思決定を行い、介助者に指示し続けて教える関係に注目した。

分析の結果、重度身体障害者はどのような介助者に対しても、まず【介助者の様子を見る】ことが示された。その際介助者の家事・介助技術ではなく、〈意思の尊重度〉や〈意思確認の量〉といった障害者の意思を尊重するかどうかが重要な基準となっており、その際の〈不安感〉は高いものであった。これは、重度の障害があるために支援者側が「善意で」障害者の意思を事前に察知し、あらゆることを先回りしてやっしまい、自分の暮らしを自分でデザインする契機が介助者によって摘まれていくことを避けた

め（前田，2009），介助者が単に介助サービスを提供することではなく、障害者の意思を尊重するかどうかを重視しているからであると考えられた。そして介助の内容が生活の全般にわたり、介助者は自分の命を預ける存在でもあるため、この人に介助を任せられるだろうかという〈不安感〉も【介助者の様子を見る】際に生じるのだろう。

そして【介助者の様子を見た】結果、障害者の【意思を尊重する介助者】であれば【自分の意思で指示】することができ、【介助

者への安心感】がある関係を築くことが示唆された。【自分の意思で指示】できることが【介助者への安心感】へとつながるのは、介助内容が食事から入浴、排泄など生活の全てにわたり、利用者の生活に踏み込んだ内容のため、身体的な距離も近く、支援の要望がより細かく個別具体的になるからではないか。指示内容の個別性が高く、時間的にも長く身体的にも近い距離感での介助が行われるのは、重度身体障害者特有の関係とも考えられる。

また、【意思を尊重しない介助者】に対しては、注意しても改善が見られないため、【自分の意思で指示】するのではなく、介助者の考え方に合わせて気を使った【介助者に合わせた指示】を行い、指示のしづらさを感じて【介助者への緊張感】のある関係を築くことが示唆された。これまで介助を受ける重度身体障害者の心理についての研究はほとんどされてこなかったが、【介助者に合わせた指示】や【介助者への緊張感】といった介助者に対して気を使った指示や指示をする抵抗感が見られたことは注目すべき点であると考えた。福祉サービスとして介助を受けているにもかかわらず、介助者に対して自分の意思をはっきり示せないということは、他人から介助を受けつつも自分が指示していくという葛藤を示したと言える。

そして、【意思の尊重をしない介助者】に対して【介助者に合わせた指示】を行う中で、〈介助に入った期間〉が長くなり介助者の〈介助内容の理解度〉が高まり【介助者の慣れ】が起きたり、自分の〈介助者の様子の把握度〉が高まる【自分の慣れ】があつたりすることで、【自分の意思で指示】することができ【介助者への安心感】のある関係につながる可能性が示唆された。その中で、単に介助者に指示し続けるのではなく〈指示方法の変化〉をして試行錯誤しながら介助者に意思を伝えて指示する様子は、八巻（2014）指摘していた「介助者が一方的に指示・指導するのではなく、ひたすら障害者の要望に従う手足でもなく、共通の目標に向かって協働する関係性」を実証的に示していると考えられた。

本研究では、重度身体障害者が介助者との関係をどのように捉

えているのかを探索的に検討することで、障害者自身が介助者の様子を見ながら指示をし、自分の意思を伝えて安心できる関係を目指していることを仮説的に示唆した。これまでほとんど検討されてこなかった重度身体障害者の視点から、介助者との関係をどのように捉えているのかを検討した点において、本研究は意義があるといえる。特に関係を築く上で、介助の具体的技術ではなく意思を尊重していると感じられることが安心感につながっていたことや、介助を受けながら指示し続けることの葛藤が示されたことは、実際の介助現場においても大きな示唆を与えるだろう。

(7) 今後の課題

GTA では、データ収集と分析を繰り返してモデルを精緻化し理論的飽和を目指していくが、本研究では分析ごとにモデルの変化があり、理論的飽和に至ったとは言えない状態である。時間的制約の要因から今回は現状で分析を終了したが、協力者の属性も限定的であるため、今後は更に幅広いデータを収集する必要がある。特に本研究の協力者は障害者運動を今もしている者に限定されており、その思想の影響を強く受けている可能性が高い。一方で障害者運動に関わりがない者ではそうした考えを持たない重度身体障害者も多くいる可能性がある。そのため本研究の知見を他の重度身体障害者に適用する際には留意が必要であろう。

今後収集するデータの候補としては、介助者との関係を認識する背景としての事業所などの制度や障害者自身の障害認識、これまでの生活経験などが挙げられる。これらは、分析の際にカテゴリとして生成されたものもあるが、データの少なさから他のカテゴリと関連づけることができなかつた可能性がある。そして、関係が築けなかつた介助者、つまり途中で辞めた介助者についてのデータを収集することもほとんどできなかつた。すぐに辞めた介助者に関する発言もあつたが、調査の際に重点的に質問することができなかつたため、今後はより多様な介助者に関するデータを収集する必要がある。調査と分析を行った印象として、この重度身体障害者の介助という領域では介助者不足が大きな問題となつており、どれだけ条件の悪い介助者であっても続けてくれるだけ良いという現状があつた。そのため障害者側から介助者を辞めさせるという行動をしにくいというのもデータの少なさに影響しているのではないかと想定された。

また、反対に関係が築けないのではなく、介助者との関係を築いて【介助者への安心感】が続いた状態、つまり介助者との関係がさらに続いた際の検討も必要だろう。本研究では【介助者への安心感】が生まれ、【自分の意思で指示】できる関係を検討しているが、その後も介助者が何らかの理由で介助を辞めるまでその関係は続く。その際に新たな現象が生じる可能性もあるだろう。その候補として、2人目、3人目の分析において指摘した、【指示の限界】や【介助者に任せたい気持ち】などの自分の意思決定ではなく、介助者の意思を認めるようなカテゴリが挙げられる。これらは【介助者への安心感】がある上で、これまで高かつた自己決定の重要性が下がり、まさに介助者に「任せなくなる」という可能性を示唆しており、これまでの自分ですべての意思決定をし、介助者に指示して教える関係とは相反することとなる。しかし、この現象こそが、八巻(2014)が指摘していたような「介助者が一方的に指示・指導するのではなく、ひたすら障害者の要望に従

う手足でもなく、共通の目標に向かって協働する関係性」を示唆しているのではないか。そのため今後はこの点に注目しながら調査と分析を行う必要があるだろう。

最後に、本研究においては重度身体障害者と介助者の関係を重度身体障害者の立場から検討したが、本来人間関係とは自分と相手との相互作用によるものである。したがって介助者の立場から捉えた重度身体障害者と介助者の関係を検討することでよりモデルを洗練されたものにできるだろう。

引用文献

- 橋本真奈美(2007). 自立障害者と介助者の関係性についての考察—創世記から現在までの、求められる役割とその本質—社会関係研究, **12**, 29-55.
- 梶晴美(2009). 重度身体障がい者の介助サービスと自立生活—社会参加と生活の満足感の視点から— 北翔大学北方圏学術情報センター年報, **2**, 121-128.
- 菅由希子(2010). 自立生活における身体障害者と介助者の介助関係に関する現状と課題 関西福祉大学社会福祉学部研究紀要, **13**, 41-48.
- 北野誠一(1993). 自立生活の思想と展望 福祉のまちづくりと新しい地域福祉の創造をめざして ミネルヴァ書房
- 前田拓也(2009). 介助現場の社会学—身体障害者の自立生活と介助者のリアリティ 生活書院
- 水野将樹(2004). 青年は信頼できる友人との関係をどのように捉えているのか—グラウンデッド・セオリー・アプローチによる仮説モデルの生成— 教育心理学研究, **52**, 170-185.
- 戈木クレイグヒル慈子(2008) 実践グラウンデッド・セオリー・アプローチ現象をとらえる 新曜社
- Strauss, A. L. & Corbin, J. (1998). Basics of Qualitative Research : Techniques and procedures for Developing grounded Theory, 2nd ed. Sage Publications, Inc. 操華子・森岡崇(訳)(1999). 質的研究の基礎: グラウンデッド・セオリー開発の技法と手順 医学書院.
- 八巻知香子(2014). 障害者の当事者性と支援者の専門性を考える 保健医療社会学論集, **24**, 13-18.
- 山本耕太(2014). 日本の臨床心理学領域におけるグラウンデッド・セオリー・アプローチ(GTA)を用いた研究の概観 立教大学臨床心理学研究, **8**, 57-65.
- 渡邊琢(2011). 介助者たちは、どう生きていくのか—障害者の地域自立生活と介助という営み, 生活書院